

団塊の世代(1947~49年生まれ)が65歳を迎え始める10月。日本の高齢化は今後、一段と進む。こうした社会変化を受け、県は11年度、地域での支え合い活動に取り組む民間団体に補助金を交付、孤立防止に向けた対策に本格的に着手した。周囲の支えが必要な高齢者を念頭に置いた事業だが、一方で活動を担う元氣な中高年層が連携を深め、自分たちが高齢者となった時に備えるという「副産物」も生まれている。(報道部・本多茜)

県、地域支え合いに補助金

突然来たけど大丈夫 間寄りなせあいあい。60年代「ろから新興住宅 構える。同様の光景は県内、あちこち。新潟 主婦ら40人のボランティア 地として開発され、現在、市の東部の住宅街に昨年5アが交代で当班し、訪れ、60代を超えた住民も多。県内の高齢者だけの月、県の補助金を活用し、た人と交流を促し、い。子ども世代は実家を世帯数は10年には約15万で開設された地域の茶の「あいあい」の周辺は、離れ、別の土地に自宅を世帯で全体の17・7%。

高齢者見守りや交流活動

新たなつながり築く

20年は23・3%にまで増える見込みだ。

課題に支援に継続事業

高齢夫婦での生活は夫婦が元氣なうちはほほほ心配ない。しかし、どちらかが倒れたり施設に入所したりすると、残された人が孤立に陥りやすい。内閣府の11年版高齢社会白書によると、60歳以上を対象に普及人と会話をする頻度を尋ねた調査では、全体の9割が「毎日」と回答。だが、1人暮らしになる男性の41・9%、女性の27・8%が2〜3日に1回以下



地域の茶の間「寄りなせあいあい」に集う人たち。お年寄りよりも中高年層の利用が多い。2011年12月、新潟市東区

中高年 仲間の輪広がる

県が進めているのは「地域支え合い体制づくり事業」。これまでに59件を採択し、2011年度に150に40件程度が補助金の交付対象となる見通しだ。

内訳は地域の茶の間といった「拠点づくり」が23件、除雪やみ出しを手伝う「生活支援」が6件、高齢者に声掛ける「見守り活動」が8件などとなっている。

活動に携わる人を「主に中高年」とあえて特定している団体もある。柏崎市比角地区の住民有志のグループ「よろこんど」では、中高年が有償で高齢者の除雪を援手している。

地域での支え合いの意義について、新潟医療福祉大学の新潟保健福祉学部の豊田保教授は、



新潟医療福祉大学 豊田保教授に聞く

「生活の質が高まる、本的なスタンスだが、充ちがちな人を近所の人から訪れ、という研究結果は学会などでも示されている。エネルギーもある。地域づくりは強力なキ

男性参加は工夫が必要



代表の吉田建夫さん(65)は中高年、高齢者でもない中高年は、家外地域で「子育で世代でも」とした理由について「居場所がない」と説明、特に退職した男性については「社会経験を地域で生かし、生きがいにしてほしい」と期待する。

絆づくり元氣なうちに

「バーンン」があるとうまく回る。今後、団塊の世代が積極的に関わった、大きな力になるだろう。この世代は個人主義が基

向のニュースや地域の課題、身近な出来事を書き添えて取り下げる「NEWS EYE」のコーナーへ、情報やご意見を寄せください。〒950-0118 新潟日報社 道部(企画報道班)まで。ファックスは025(378) 6540。メールはeye@nissai-a-hippo.co.jp。Uf.

取材メモ

これから65歳以上の「高齢者」になる団塊の世代は核家族化を進めてきた人たち。自らも子どもをあてて自然に傾向があるようだ。取材中、この世代の人たちが口にした「遠い親せきより近くの他人」との言葉。子ども世代としては頼もしくもあり寂しくもある。団塊の世代は社会のリーダー役を果たしてきた。「地域活動」の参加は、風潮を、「地域で支え合い」というかつての日本の姿に戻せるのもまた、この世代なのかもしれない。